

案内図



利用案内

開館時間 午前9時30分～午後5時30分
休館日 毎週月曜日・毎月第2火曜日・年末年始
 (月曜日・第2火曜日が祝日または振替休日)のときは閉館し、その翌日が休館になります。)
観覧料 210円(20名以上の団体は各170円)
 ※平成28年3月時点料金
 ※消費税の動向により変更となる場合があります
 ※中学生以下・障がい者手帳をお持ちの方は無料
交通 知多半島道路半田中央ICより東へ、岩清西町の交差点を右折、終町4の交差点を左折、車で約5分
駐車場 57台・身障者用4台・バス専用3台(無料)

新美南吉記念館

〒475-0966 愛知県半田市岩清西町1-10-1
 TEL(0569)26-4888 FAX(0569)26-4889
 URL <http://www.nankichi.gr.jp>

展示室

展示室では、自筆原稿や関係の図書、日記、手紙などの資料を通して、南吉の生涯と文学活動を紹介しています。また、「ごん狐」などの代表作のジオラマやデジタル資料閲覧コーナー、ビデオシアターの番組を通して、南吉文学の世界に触れることができます。



図書閲覧室

図書閲覧室には、南吉の全集や絵本のほか、研究書や日本の児童文学に関する文献、郷土資料などが集められ、南吉文学を知る手助けをしてくれます。

矢勝川堤の彼岸花



記念館のすぐ北側を流れ、「ごん狐」の舞台でもある矢勝川の堤には、秋の彼岸(9月下旬)になると、東西約1.5kmにわたって三百万本以上の彼岸花が咲き、童話の里を彩ります。

敷地全体図



童話の森から見た記念館

童話の森

「ごん狐」の舞台となった中山。遊歩道が巡り、せせらぎが流れています。



記念館平面図

新美南吉記念館



NIIMI NANKICHI MEMORIAL MUSEUM

また今日も己を探す

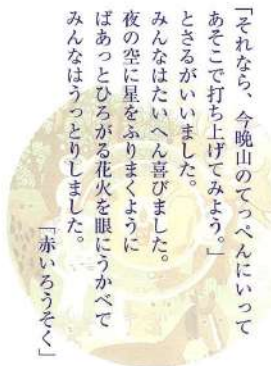
その中山から、
すこしはなれた山の中に、
「ごん狐」という狐がいました。
ごんは、ひとりぼっちの小狐で、
しだのいっばいしげった森の中に
穴をほって住んでいました。



半田中学校時代の南吉



半田第二尋常小学校卒業証書



「赤いろうそく」



東京外語時代の新美南吉

久助君はびつくりした。
久助君のまえに立っているのは、兵太郎君ではない、
みたこともない、さびしい顔つきの少年である。
なんということか。
兵太郎君だと思ひこんで、こんな知らない少年と、
じぶんは、半日くるっていたのである。

「久助君の話」



少女出版「良寛物語
手毬と鉢の子」



竹製の台ランプ

ランプ、ランプ、なつかしいランプ。
やがて巳之助はかがんで、
足もとから石ころを一つひろった。
そして、いちばん大きくともっているランプに
ねらいをさだめて、力いっぱい投げた。
パリーンと音がして、大きい火がひとつ消えた。

「おじいさんのランプ」



「赤い鳥」昭和7年1月号



スバルタノート（「権狐」草稿）



「手袋を買いに」原稿



富士登山の際の画帖「六根噴天」



晩年の新美南吉



中央 第一童話集「おじいさんのランプ」、左 第二童話集「牛をつないだ棒の木」、右 第三童話集「花のきりと盗人たち」

新美南吉略年譜



半田中学校時代の南吉

年号	年齢	出来事
大正	〇	七月三十日、愛知県知多郡半田町現・半田市で、畳屋を営む父渡辺多蔵と母りゑの二男として生まれる。本名正八。
	六	十一月、母りゑ死亡。
	八	二月、継母志ん入籍。同月翼母弟益吉生まれる。
	四	四月、半田第一尋常小学校（現・岩清小学校）入学。
	七	七月、実母りゑの生家新美家の養子となるが、寂しさに耐えられず、十二月、渡辺家に戻る。
	八	三月、半田第二尋常小学校卒業。
	二	四月、半田中学校（現・半田高等学校）入学。
昭和	二	文学に興味を持ち、童話を創作し始める。
	四	この年、多くの童話群を創作、盛んに雑誌へ投稿する。自らも岩清の有志とかり版刷りの同人誌「オリオン」を出す。
	六	三月、半田中学校卒業。岡崎師範学校を受験するが身体検査で大不合格。四月から八月まで、半田第二尋常小学校に代用教員として勤務。かたわら、雑誌「赤い鳥」に「南吉」のペンネームで童話群を投稿。「正坊とクロ」(八月号)、「張礼備」(十一月号)が掲載される。九月、童話雑誌「チノキ」へ加入。巽聖歌と知り合う。十月、草稿「権狐」執筆。
	七	四月、東京外国語学校英語部文科に入学。「赤い鳥」に「ごん狐」(二月号)、「のら犬」(五月号)が載る。
	八	十一月、「手袋を買いに」創作。
	九	二月、「一回目の晩飯」(蕉二冊)などの小説を執筆。
	一〇	五月、「アンデルセンのカナシミ」など幼年童話約三十篇を創作。
	一一	三月、東京外国語学校卒業。東京商工会議所内東京土産品協会に勤める。十月、「一回目の晩飯」十一月、帰郷。
	一二	四月、河和第一尋常高等小学校（現・河和小学校の代用教員）となる。六月、「空気ポンプ」創作。九月、杉沼商会桐根山畜産研究所に任送込みで勤める。
	一三	四月、恩師のはからいで安城高等女学校（現・安城高校）の教諭となる。
	一四	五月から「哈爾濱日日新聞」へ「最後の胡弓弾き」、「久助君の話」"花を埋める"などを寄稿。七月、生徒と富士登山。
	一五	「哈爾濱日日新聞」に「尻」、「首ちゃんは豆を煮ていた」、「家などを寄稿」、「婦女界」に「銭」、「新児童文化」に「川」が掲載され、ようやく世に注目され始める。
	一六	十月、初の単行本「良寛物語 手毬と鉢の子」出版。十一月、評論「童話に於ける物語性の喪失」発表。
	一七	三月、「ごん狐」の巻、四月「おじいさんのランプ」、五月「牛をつないだ棒の木」"花のきりと盗人たち"「百姓の足、坊さんの足」など代表作を次々に書き上げる。十月、第一童話集「おじいさんのランプ」出版。
	一八	病状悪化。自宅で療養しながら「狐」"小さい太郎の悲しみ"「虎」を創作。二月二十二日、喉頭結核のため永眠。享年二十九歳七カ月。法名は釈文成。